羽陽学園短期大学紀要　第10巻　第４号（通巻38号）2018年２月
Bull. of Uyo Gakuen College, Vol.10, No.4, February 2018

ドキュメンテーションの導入方法の検討

－大量の紙コップを使った保育実践を通して－

樋　口　健　介　幼児教育科
村　岡　美　沙　附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園
元　木　麻　水　附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園
大　西　美　里　附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園
庄　司　　　恵　附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園

（2017年10月31日受理）

〔　要　　約　〕

本研究では、ドキュメンテーションの作成とポスター発表を通して、その導入方法を検討した。ドキュメンテーションに写真を用いることで、保育の振り返りのやりやすさ、他者との共有において、利点があった。大量の紙コップを使った遊びは、撮影のやりやすさ、撮影者の確保、子どもたちの遊びの広がりの点でドキュメンテーションを行いやすいことがわかった。しかし、２歳児、３歳児クラスにおいては遊びが広がらず、継続したドキュメンテーションに至らなかった。作成の観点については、保育者自身の子どもたちへの関わりを特に意識して記録することが保育の省察へとつながった。書き方については、形式を決め過ぎずに作成することで保育者の表現としてのドキュメンテーションの面白さが見られた。写真を用いたドキュメンテーションは、作成すること自体が保育者のまなざしに変化をもたらし、遊びの結果から遊びのプロセスへ目を向けさせるきっかけとなった。ドキュメンテーションの作成には保育者の意識変容をもたらす効果があり、保育者の専門性の向上に繋がる可能性があると考えた。

Ⅰ．はじめに

イギリスの教育社会学者バーンスティンは幼児教育を「見えない教育方法」と特徴づけた[1)]。一人一人の子どもの個人差に応じて、暮らしと遊びの中で行われる幼児教育は目的や過程、評価が実践者以外には可視化されにくい特徴を持つ。秋田喜代美らによれば、小学校以上の教育のような基準や目標が外部に見えにくいことが、「保育の質」や「保育者の専門性」が頻繁に議論される根源的な要因である[2)]。

幼児教育の見えにくいという課題への有効な手立ての一つとして、イタリアのレッジョ・エミリア・アプローチ[3)]のドキュメンテーションが注目されている。ドキュメンテーションは幼児の発言や行動を写真やビデオ、絵などを用いながら記録し、幼児の協同的な学びを可視化するツールであり、保育者の省察や保育計画、幼児とのコミュニケーション、親や地域住民の教育参加を促す通路としての機能を果たしている[4)]。

日本においては、2001年にワタリウム美術館で開催された「子どもたちの100の言葉」展でレッジョ・エミリアの幼児教育が取り上げられて以降、様々な園でのドキュメンテーションの取り組みが書籍やインターネットなどで紹介されるようになった。しかし、それは一部の先駆的で実験的な園での取り組みにとどまり、ドキュメンテーションというツールが一般化しているとは言い難い。ドキュメンテーションの有効性は注目されてはいるが、その導入に対しては保育現場が記録に労力をかける時間の余裕がないことや保育者の子ども数比率のゆとりのなさ、ドキュメンテーションの方法や活用法への理解不足が課題となっていると考える。

そこで本研究は、保育者養成校教員の筆者と現場の保育者４名が共同でドキュメンテーションを作成し、その導入方法を検討することを目的とした。また、ドキュメンテーションの作成から見える「保育者の専門性」について考察した。

Ⅱ．方法

１．実施場所

保育実践は、羽陽学園短期大学附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園において行った。鈴川第二幼稚園ではこれまで文書による保育記録や、保護者向けに月ごとに行った行事を写真で掲示することは行われている。写真や絵とともに保育者自身の視点や子ども

の言葉や行動を記録するドキュメンテーションについては、作成するのは初めてである。

２．記録者

記録者は以下の４名である。羽陽学園短期大学附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園の勤続年数が１年目から８年目の比較的若い保育者である。

村岡　美沙（年長児クラス担任）
元木　麻水（年中児クラス担任）
大西　美里（年少児クラス担任）
庄司　　恵（二歳児クラス担任）

３．ドキュメンテーションの方法とその共有、目的

ドキュメンテーションには何か決まった方法や形式があるわけではない。どのような書き方であっても、どのような道具を使っても基本的にはかまわないと考えている。大切なのは、記録を取ることが目的ではなく、ドキュメンテーションを誰と共有し、何を目的に作るかということである。目的や園の状況に合わせて、記録方法や形式は使いやすくカスタマイズしていくのが理想的だと考える。

本研究においては、ドキュメンテーションを「まず行ってみる」という点に重きを置いたため、共有の範囲は保育者間に限定した。ドキュメンテーションを初めから保護者向けに作ってしまうと、見せなければならないプレッシャーがある上に、「保育をどう見せるか」を意識し過ぎた広報媒体のようになってしまうのではないかと考えたからである。またドキュメンテーションを作成する過程において、保育者自身が保育を振り返り、「自己省察する機会が重要だ[5)]」と考えたからである。そのため、今回のドキュメンテーションの目的は幼児の理解と保育実践に対する保育者自身の省察、保育者間での情報共有とした。

ドキュメンテーションの作成方法には、デジタルカメラによって撮影した写真を用いることとした。デジタルカメラやプリンターはすでに園にあり、使用が容易であり、保育者の写真撮影への負担感も少ないと考えたからである。記録のフォーマットは特に指定せず、撮影した写真をＡ４サイズのコピー用紙にマスキングテープで貼り、手書きで記録するようにした。パソコン上でドキュメンテーションを作成する方法も考えたが、手書きの方が保育者に親しみがあり、カラフルなマスキングテープで取ったり貼ったりしながら記録することで作成すること自体が少しでも楽しくなるのではないかと考えた。

記録の枚数のノルマなどは特に設けず、日々の保育業務のなかで、可能な範囲で無理せずに行うこととした。以下の記録のポイント[6)]を保育者へ説明し、ドキュメンテーションを作成した。

①日時、場所、人数、クラス
②写真撮影の観点
・子どもがカメラに向かってピースしているような写真ではなく、子どもが対象物に向かってる様子を撮る。
・撮影を誰かにお願いできるときは自分がフレームに入っている写真も撮る。
③ドキュメンテーション作成の観点
・子どもが探求している場面（子どもが自分から動き出している場面、活動が継続・変化している場面、誰かと協同的なかかわりが生まれている場面、気づき）
・会話（子ども同士、保育者と子ども、ひとり言）
・保育者の関わりについて（声掛け（どうなるかな、～しましょう、～してみよう、すごい！面白いね！など）、やって見せる（見本、勝手に横でやる）など）
・課題、問題、困ったこと

４．保育実践の内容

本研究においては、ドキュメンテーションを行う保育実践に使う素材を設定した。どのような保育場面においても、記録を作成することは可能だが、保育が日々継続して行われる中で、どの場面を抽出して記録するかは難しい。そこで今回は、保育実践の素材として12000個の紙コップを提供し、それを使った遊びのプロセスを記録することとした。12000個の紙コップの保育実践での使い方については、それぞれの保育者に任せることとした。また、保育実践の回数や活動時間、場面（設定保育、一斉活動、自由遊びなど）なども限定せず、子どもたちの活動の様子、園の行事などに配慮して無理のない範囲で実施することにした。

５．スケジュール

ドキュメンテーションの導入を検討するにあたり、羽陽学園短期大学で行う幼児教育研究会[7)]を活用し、以下のようなスケジュールを立てた。

平成28年９月３日（土）第二回　幼児教育研究会
　大量の紙コップを使った遊び
平成28年９月～平成29年２月　園での保育実践
　ドキュメンテーションの作成
平成29年２月４日（土）第三回　幼児教育研究会
　ドキュメンテーションのポスター発表

まず、９月の幼児教育研究会で本研究の記録者を含む附属園の保育者14名、短大教員５名で大量の紙コップを使った遊びのワークショップを行った（図１）。まず保育者自身が試しに遊び、素材や遊びの特徴を理解した上で、子どもたちへどのような保育実践として提供するかを考えた。その際にドキュメンテーションの大まかな方法を保育実践を行う４名の保育者に筆者が作ったドキュメンテーションを例に説明した。

その後、12000個の紙コップを園へ持ち帰り、子どもたちとの遊びに活用した。その内容を写真を用いたドキュメンテーションとして作成した。その間、６回ほど筆者が園を訪れ、保育実践に一緒に参加したり、写真を撮影したり、作成したドキュメンテーションを確認した。

最後に、年度末の幼児教育研究会において、作成したドキュメンテーションをポスター発表という形で他園の保育者や短大教員と共有した（図２）。ポスター発表では参加者と保育実践をした保育者が保育実践について会話しながら、気づいたことや感想や質問などがあれば、気軽に付箋に書いてポスターへ貼ってもらうようにした。

図１　大量の紙コップを使った遊びワークショップ

図２　ドキュメンテーションのポスター発表

Ⅲ．実施報告

１．保育実践の記録

１）庄司　恵（２歳児クラス）

日時	幼児の人数	保育形態	場所	記録の枚数
2016年10月31日（月） 10：00～10：40	10名	一斉活動	保育室	４枚
2016年11月11日（金） 10：00～10：45	12名	一斉活動	保育室	７枚

※紙コップは約1500個を使った。

２）大西美里（年少クラス）

日時	幼児の人数	保育形態	場所	記録の枚数
2016年10月31日（月） 10：40～11：40	24名	一斉活動	遊戯場	7枚
2016年11月７日（月） 10：40～11：40	約30名	一斉活動 ※	遊戯場	13枚
2016年11月29日（火） 10：00～11：00	25名	一斉活動	遊戯場	7枚

※紙コップは約6000～9000個を使った。
※2016年11月７日の活動は保育園と隣接する認定こども園との合同保育であった。

３）元木麻水（年中クラス）

日時	幼児の人数	保育形態	場所	記録の枚数
2016年10月５日（水） 10：30～11：40	27名	一斉活動 （２クラス合同）	遊戯場	８枚
2016年10月25日（火） 10：30～11：40	25名	一斉活動 （２クラス合同）	遊戯場	13枚
2016年11月９日（水） 10：30～11：40	18名	自由遊び （異年齢合同）	遊戯場	10枚
2016年11月11日（金） 10：30～11：40	48名	一斉活動 ※	遊戯場	７枚
2016年12月２日（金） 10：30～11：40	27名	一斉活動 （２クラス合同）	保育室	５枚
2016年12月８日（木） 10：30～11：40	27名	一斉活動 （２クラス合同）	保育室	８枚
2017年１月23日（月）	27名	自由遊び （２クラス合同）	なかよし広場	６枚

※紙コップは約12000個を使った。
※2016年11月11日の活動は保育園と隣接する認定こども園との合同保育であった。

４）村岡美沙（年長クラス）

日時	幼児の人数	保育形態	場所	記録の枚数
2016年10月７日（金） 10：30～11：45	27名	一斉活動	遊戯場	３枚
2016年11月１日（火） 10：30～11：45	27名	一斉活動	遊戯場	９枚
2016年11月14日（月）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	４枚
2016年11月15日（火）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2016年11月16日（水）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	２枚
2016年11月17日（木）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2016年11月24日（木）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2016年11月25日（金）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2016年11月28日（月）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2016年11月29日（火）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2016年11月30日（水）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2017年１月18日（水）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2017年２月22日（水）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	１枚
2017年２月23日（木）	約10～30名	自由遊び	なかよし広場	２枚

※紙コップは約12000個を使った。
※最初の２回の保育実践以外はすべて自由遊びの中で子どもの自主性に応じて行われたため、時間や人数が流動的となった。なかよし広場が紙コップ遊びをする場所として定着し、後半は年中、年少児も自然に遊びに参加するようになった。

２．保育実践とドキュメンテーションについての振り返り

大量の紙コップを使った遊びの保育実践と、ドキュメンテーションについての振り返りを４名の保育者が記載した。紙コップ遊びについては、「①子どもの育ち（変化）について」、「②保育者の関わりについて」の二点、ドキュメンテーションについては、「③振り返りへの活用について」、「④記録の労力について」の二点を主な観点とした。振り返りの内容には、平成29年２月４日（土）の幼児教育研究会でのポスター発表の際に、他園の保育者や養成校の教員からの質問に答えたものや保育者自身の気づきも含んでいる。

１）庄司　恵　先生（２歳児クラス担任）

①子どもの育ち（変化）について

・紙コップ遊び１回目と２回目のスタート時の子どもの様子の変化について

１回目の紙コップ遊びのスタート時は、教師が紙コップをばらまく音にびっくりして固まる姿が見られた。しかし、その後、紙コップで遊ぶ中で紙コップへの親しみがでてきたのか、２回目のスタート時には固まる様子は全く見られなかった。むしろ２回目のスタート時には、教師と「紙コップの雨～」と言いながら一緒に紙コップをばらまくことを喜んでいる様子だった。１回目と２回目の子どもたちの姿の違いから、子どもたちの新しいものをすぐに取り入れる柔軟性が感じられた。

・見立て遊びについて

１回目も２回目も共通して紙コップを使った見立て遊びが盛り上がった。１回目の見立て遊びではゾウやウサギ、おじいさんのひげなど、絵本や手遊び、普段の遊びの中で子どもたちにとって身近なものが中心になっていたように思う。それに対して、２回目の見立て遊びではクリスマスシーズンにちなんだサンタクロースや季節の歌として、その時期に歌っていた『森の音楽隊』の振り付けになっていたバイオリンなど、その時期ならではの子どもたちにとって好きな物事や関心がより反映されていたように思う。

②保育者の関わりについて

・紙コップ遊びをする際、「はだし」を呼びかけたことについて

保育者自身、自然な流れの中で呼びかけてしまいその意図も忘れてしまっていたが、おそらく２歳児がまだうまく体のバランスが取れず、紙コップを踏んでしまった時の転倒の可能性を少しでも無くすために（靴を履いている時より、はだしの方が紙コップを踏もうとしなくなるのではないか？と予想した。）、そして今回は「紙コップで遊んでほしい」という思いがあったため、紙コップを踏んで遊ぼうとすることをできるだけ避けたいという思いがあったと思う。（紙コップを踏む感触、音なども子どもたちにとって魅力的に感じるのではいか？と予想した。）

・子どもたちが紙コップの片づけを頑張っていた点について

片づけは普段の生活の中でも、できるだけ楽しくみんなで最後まで助け合って片づけられるように意識して声掛けやかかわりを持つように心がけている。「お部屋がきれいになると、気持ちいいね」「おもちゃさん、きっときれいにお家に帰してもらって喜んでるね」「みんなですするとなんでも楽しいよね」「みんなが片づけてくれて助かったな」…など、片づけをする心地よさや達成感、満足感を味わえるようにしている。

③ドキュメンテーションの振り返りへの活用について

・幼児の姿を対比させた記録の方法について（図３、４）

「紙コップを一人で並べる」という遊びのスタートは同じだったものの、紙コップを並べる置き方の向きや友達とのかかわり方への違いが段々みられてきたことに面白さを感じ記録した。

Ａちゃんは11月から入園したばかりの時期でもあったことから、まだ友達とのかかわりも少なかった。その中で紙コップ遊びを通して友達から話しかけてもらえたこと、同じイメージを持ってごっこ遊びができたことが嬉しかったのではないかと思われる。

それに対してＫちゃんは普段から友達とのかかわりも多く、優しくおもちゃなども譲ってくれるタイプ。ただ今回の紙コップ遊びの際には友達からの呼びかけにも珍しく応えず、一人でもくもくと並べる姿が保育者にとっても、意外だった。普段は友達の思いに気づき、優しく譲ってくれることが多い反面、本当に自分がやりたいことに対しては一人でもくもくと取り組む「芯の強さ」のようなものをもしかしたら持っているのかな？と感じた場面だった。

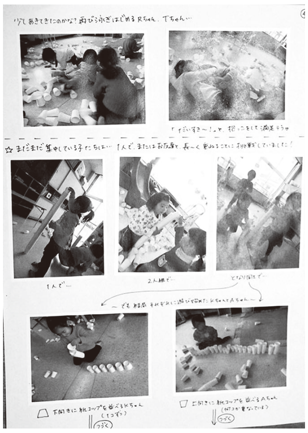

図3　２歳児二人の様子を対比させて記録したドキュメンテーション①

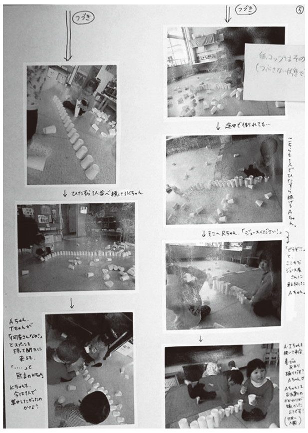

図4　２歳児二人の様子を対比させて記録したドキュメンテーション②

ドキュメンテーションとしてまとめることによって、見ていただいた先生方から質問をいただき、普段は何気なく保育の中で自分が言っていることや子どもたちの姿、かかわりなどを考えたり、振り返ったりすることができた。（どうして、はだしで遊んでいるの？見立て遊びの「バイオリン」の発想はどこから来てるの？…など。）

④記録の労力について

記録については思っていた以上に気楽にでき、一回分の資料をまとめるのにも30分弱くらいと短時間で完

成させることができた。写真があることでその時の状況や子どもたちのつぶやきなども思い出しやすかった。ただ、だれが見てもわかりやすい資料にするためには、もう少しパッとみて流れがわかるような工夫が必要だったという反省がある。今後に活かしていきたい。

２）大西　美里　先生（年少クラス担任）

①子どもの育ち（変化）について

年少児ということで、一斉に同じ場所に集まり「活動」という形で時間を取り、三回行った。なかなか継続して行うことが難しく、その都度最初から（箱から出す所から）やることになった。子どもの育ちとしては、やはり初めは見立て遊びが多かったが、年中、年長児の真似をして積み上げる姿が見られた。「長くする」という行為一つにしても、最初は手に持って重ねていたものも、倒してつなげた方が長くできるということや高くするのも円に並べると倒れないみたい…など、遊びの中で自分たちで気づいたこともあったように思う。１月に入ってからはたまに園の二階へ出かけ、年中長児が自由遊びで紙コップ遊びを行っている中へ混ぜてもらいに行く姿も見られる。ウレタン積み木など別のものが一緒にあると、また別の遊びも見られるのか、引き続き見ていきたい。

②保育者の関わりについて

活動の中で特に意図を持って話をした場面は導入、片付けの部分である。ただ「片付けしよう！」だけでなく「どのくらい長くできるかな？」などと声掛けを変えるだけでも子どもの意識は変わるものだと思う。年少児ということもあり、初めての活動に不安のある幼児も多かった。１回目にはなかなか遊びが見つけられない子もいたため、素材に触れ、興味を持てるよう声を掛けるというよりは、隣で先生が遊ぶ姿を見せたりするところから始まった。

・無目的な遊びから学びを見つける難しさについて（図５）

活動しながら、どう進めれば、子どもの発想を最大限に生かして楽しめるのか、とても悩んだところだ。今後、声掛け、提案をしていくときに「子どもの発想」をいかに大切していけるかを考えていきたい。また見守る姿勢の大事さを常に忘れずにいたいと思う。

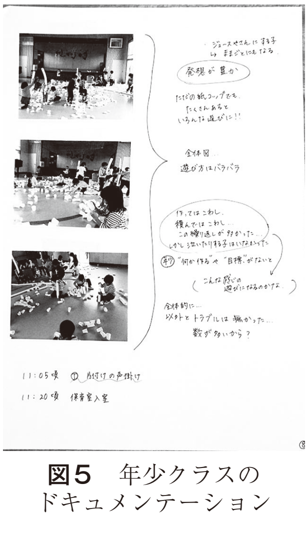

図５　年少クラスのドキュメンテーション

③ドキュメンテーションの振り返りへの活用について

他の先生方のドキュメンテーションを見て、子ども様子だけでなく、その時々の先生の声掛けや思い、子どもの思いの読み取りなどが細かくまとめられており、何もわからずに初めて見た人でもわかる内容になっているなと感じた。簡潔だが内容はとても深く見やすく勉強になった。特に年中長児は活動を重ねる中で、子どもの遊びの変化が目で見てわかる記録であった。今後、活用する機会があれば参考にさせていただきたい。

④記録の労力について

思っていたより記録に時間はかからなかった。写真があるため、記録の際に思い出しながら、まとめることができた。「写真を撮る人」がいると保育者自身が子どもと関わる写真を撮ることができ、子どもと話した内容を思い出しやすいかもしれないと思った。

３）元木　麻水　先生（年中クラス担任）

①子どもの育ち（変化）について

・子どもたち全体の変化について

初めて行ったときから比べると、重ねる、積む、並べる、置くなどのことを繰り返し行ってきたことで遊びのバリエーションが増えた。また、「もっと～してみたい」「もっと～してみたら、どうなるかな」といった姿が見られるようになった。一つの遊びをとことん遊びこんでいく面白さを少しずつ味わっているようだった。

・積んだ紙コップを壊して回るＡ君の変化について

活動を始めた10月～12月にかけては、自分が壊したい時に壊す。外にコップを投げて、壊して楽しい♪という感じだった。年が明けてからは、逆に自分が作っていたものを壊されて「〇〇ちゃんが壊した～」と大号泣する場面があった。壊される立場になってみて、相手の気持ちを自分でも感じているようだった。しかし、今もやっぱり壊すのは好き♪という感じなのか、壊し壊され…を繰り返している。

・なかなか遊び方が分からず、遊びに参加できないＲ君について

最初は遊戯場に来れたことが楽しくて大はしゃぎしていた。活動を５回ほど行うが、グループで対決する場面などでも、遊び方がわからない（紙コップは飲むために使うものという考えがあるのか？）からか、ぼ～っと座って見ている様子があった。しかし経験を重ねていくにつれて、友達と一緒に重ねたり、積んだりして遊ぶ楽しさが分かってきた様子である。しかし、今はブロック遊びが大好きなため、あまり紙コップには触れない。

②保育者の関わりについて

・競争ゲームについて

家やお城、山など大まかなものを指定して、それに対してそれぞれのイメージを持って、自由に好きなように表現することが大好きな学年だったため、競争や対決を行う中でどんな形が出来上がるのか見てみたいと考えた。保育者は三角や四角、丸い壁のようなものなど、とりあえず重ねて壁のようにするのかな（図６）、と子どもたちが作るものを予想していた。しかし、子どもたちは具体的な家の間取り（玄関やキッチン、寝室など）までイメージして遊んでいた。自分たちを紙コップで囲いながら、お家に見立てて遊ぶ姿（図７）が多く見られた。日々の遊びからイメージが出てきたようだった。

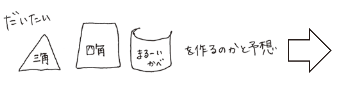

図6　元木先生の子どもたちの作るものの予想図

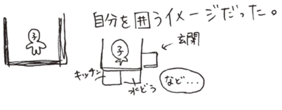

図7　こどもたちが実際に作ったものの図

③ドキュメンテーションの振り返りへの活用について

ドキュメンテーションを作り始めた当初は、「遊びの種類と幅」「誰と遊んでいるのか」「トラブル、その原因」を記録していた（図８）。徐々に「保育者が関わった遊び」「保育者の声掛け」「保育者の働きかけに対しての子どもの反応」「環境設定」も記録していくようになった（図９）。子どもたちの記録だけではなく、保育者自身が何をしていたかに目を向けることで子どもたち全体の姿を見ることができるようになった。回数を重ねていくことで、子どもたちそれぞれの思いや成長もより感じることができた。保育者が「～したら、～になった」という視点から保育をもっと見ていきたい。

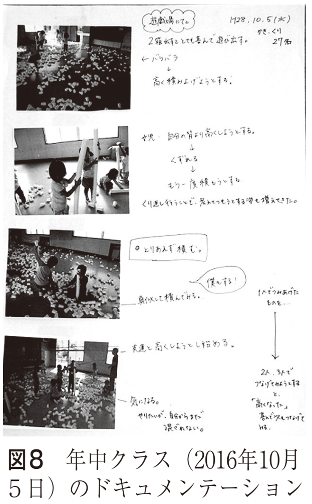

図8　年中クラス（2016年10月5日）のドキュメンテーション

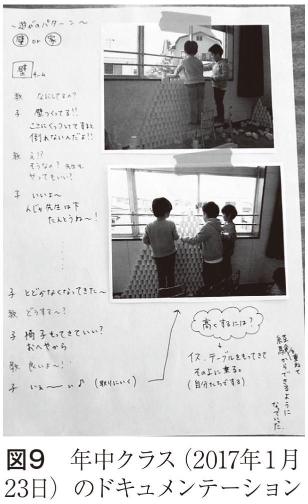

図9　年中クラス（2017年1月23日）のドキュメンテーション

・積んだ紙コップを壊して回るＡ君の気持ちについて

もともとの性格もある（普段の遊びの姿）かもしれないが、気持ちが行動に出てしまったのかなと思った。

④記録の労力について

写真を貼っただけのページについてはもっとしっかり記録すべきだと感じた。文字だけでたくさん記録するよりは写真を使い楽しくできた。写真を使うことで視覚的に示すことができ、見やすく伝わりやすいと思う。写真を撮ってくれる先生がいるとすごく助かった。印刷については、パソコンが空いていないと時間がかかり、活動時に何をやったか忘れてしまい、少し大変だった。

４）村岡　美沙　先生（年長クラス担任）

①子どもの育ち（変化）について

・紙コップで遊ぶ中で子供たちのどんな姿が見られたらと考えていたか？

「遊び」そのものについて、保育者自身が課題を感じていたところだ。子どもたち自身が「これがしたい」「これが面白い、大好き！」という気持ちを持っているのか？ということを感じていた。紙コップ遊びが何かのきっかけになればなぁ、という思いがあり、自由遊びの中で繰り返し取り組んだ。

ひたすら高くする、並べる、見立て、新しい遊びを作る、さまざまな姿が見られた。一人でもくもくと遊ぶ子どもは、どちらかというと見た目のきれいさや凄さを追求している感じを受けた。保育者や他の子どもに認められたいという思いが含まれているのではないか、と思う。友達と一緒に遊ぶ子どもは、友達と同じものを共有し、友達とのつながりを求めている印象を受けた。

・自由遊びが中心になったのはなぜか？

自分で選ぶ、決めることをゼロから行うのは難しいので紙コップ遊びが良いきっかけになったと思う。興味がある子ども、熱中する子ども、そうでなかった子どもは当然いるので、選べることが大切だと考える。

・継続した遊びになったのはなぜか？

遊びは続いていく、積み重なっていくものだと思う。子どもたちは面白いと思うことは何度でもやりたい。そう思える環境を作っていくことが保育者の役目なんだろうと思う。紙コップ遊びが終わった後に、紙コップをすべて片づけてまっさらな状態にしたことも、挑戦中のもの、作りかけのもの、完成したものを残しておいたこともある。どちらも子どもたちの遊びが次に繋がるように保育者が意図したつもりである。

・徐々に見立てが増えている？

友達とのイメージの共有、一緒に、という思いが強

くなっている時期、年齢なのかな、と思う。ただ見立て遊びをするというよりも、自分としての思いを形にしながらも、友達とどう一緒に遊んでいくか、のようなところが出てきたのかな？と考える。

②保育者の関わりについて

・自ら取り組む力を育てたい

クラスの傾向として、決められたこと、○○しようという活動には喜んで取り組む。「どうやるの？」「これでいいの？」という様子がよく見られ、あるものや与えられたもので遊ぶ印象があるクラスであった。経験が少ないと遊びの選択肢も少なくなってしまう。紙コップ遊びをきっかけに「自ら」取り組む、「遊びこむ」という経験ができればと考えた。

・保育者自身が楽しむことについて

保育者自身が子どもたちと同じように同じ立場で面白がり遊んでいく。子どもの発見や気づき、感動、「見て見て！」に対して、純粋にすごいなぁ、面白いな、と思った。また、「これなんだろう？」と保育者が疑問に思ったことや、興味を持ったことを質問すると見当違いであったりする場面もあり、保育者自身が楽しかった。そこから、遊びにもう少しだけ変化を付けたり、一歩進んだりという部分は保育者のかかわり方次第なんだろうな、と感じた。こうすれば面白いかも（やってみないとわからないが…）ということを子どもと共にやっていくように心がけた。「先生はこういうことができて当たり前！」という思いが子どもの中にあったのではないかと思う。教えてもらうのではなく、一緒にやっていく中で、保育者もうまくいかないことがあるし遊びに向かう中で感情の動きがあることも感じ取ってほしかった。

・競い合うことについて

片付けや一斉活動では競い合う機会も設けた。その方が子どもたちも気持ちが入りやすいため（わかりやすい）。また、友達や周りの存在を意識する、ということを大切にしていきたいと思った。

・作品を残しておくことについて

いつもは紙コップを箱に片付けてしまうところを、「せっかくここまでやったから残しておきたいな～」「きっと子どもたちはそれがいいって言うだろうな～、続きでまた遊びが始まればいいな～」と想像し、紙コップを積んで作ったものを残した。子どもたちは「えっ、このままでいいの⁉」と驚き、喜んでいた。その後、作ったもの、残したいものは残していくことが定着した。

③ドキュメンテーションの振り返りへの活用について

・なぜ、神社の見立て遊びが展開したのか？

たまたま、連ねた紙コップを鳥居のように子どもたちが立てバランスを取っているのを見付け、「鳥居？」と保育者が声を掛けた（図10）。秋の季節、『まっかなあき』を部屋でも歌っていたこともあり、紙コップの形と鳥居のイメージが合致したようである。「鳥居は神社にあるよね～」と言ったことをきっかけに、日を改めても、神社を作ろう！という話になった。保育者が違う声掛けをしていたら、まったく違うものになっただろう。神社のイメージが共有しやすかったのかもしれない。バランスを取れて立つことがおもしろく、そこを認められたことも嬉しかったようであった。

図10　年長クラスでの神社づくりのドキュメンテーション

・子どもたちが選んだ遊びの中で行ったのか？

自由に自分で考えてということがあまり得意ではないクラスと感じていたので、自ら選んだ遊びの一つに紙コップ遊びがなれば、という思いがあった。

・片付けも子どもたちでしているのか？

片付けを「片付け」と思わずに楽しむようにしている。自身も片付けは苦手だ。

・ドキュメンテーションのつけ方に変化はあったか？

自由遊びがほとんどで同じ目的に向かって、という状況は少なかった。いろんな場所でいろんなことが起こっている。それぞれの子どもの動きや流れがどのようなものなのか、意識するようになったかな、と思う。「どんな思いでこれ（ものや活動）に向かっているのかな？」と普段から考えながら過ごしているつもりだが、写真にメモすることでより考えることが増えたように思う。一つひとつの出来事を追っていくと、写真もすごい量になってしまう。厳選するが、厳選せずに（結果だけ、一枚だけにせずに）記録していく方が人に見せることを考えると活動の流れはわかりやすいよな、と思った。

④記録の労力について

写真を見ながら「あぁ、そうだったな～」と振り返りながら、楽しく記録した。クラス担任は一人なので、誰かが写真を撮ってくれると遊びに集中できる（してしまう）と思う。第三者が写真を撮ると、場面の捉え方も違ってくると思うので、それはそれで面白い部分で撮影してくれた人といろいろな話ができるだろうなと思う。しかし、現状、そこまでの余裕が現場にある

かというと、正直なところ難しい。
・ドキュメンテーションを子どもたちへ見せることについて

紙コップ遊びに関わらず、保育はどんどん変化していくものなので、写真に残しておきたい。紙コップ遊びの中では、子どもたちの方から「これ見て！」「写真に撮っておいて！」という声が上がった。過程が目に見えるということが、遊びのおもしろさを増す要因にもなるのではないかと思う。
・ドキュメンテーションを保護者へ見せることについて

保育参観では一斉活動がほとんどであり、仮に自由遊びを見てもらっても、子どもたちはどうしてもお家の人がいるという意識になってしまう。普段の遊びの様子がどんなものなのか、どんな風に遊びが展開されているのか、広がっているのか、ということを見ていただく、またそれを基に話をするという機会が持てると面白いと思う。子どもたちの取り組む表情からも感じ取れるものがあると思うので、それもうまく使えたらいいな、と考える。

Ⅳ．考察

１．ドキュメンテーションの導入方法の検討

１）ドキュメンテーションに写真を用いることによる振り返りのやりやすさについて

ドキュメンテーションを作成することは、保育者自身が行った保育を振り返ることである。終わってしまった保育実践を記憶を頼りに文章に起こすことは、時間的にも技術的にも難しいことである。またそれを第三者が読むときにも時間がかかる。写真は保育者が保育を思い出す手掛かりとなる。文章で表現すると膨大な量になってしまう情報も、写真一枚で視覚的にわかりやすく表れる。さらに写真が複数枚並ぶと保育のプロセスも想起しやすくなる。写真に保育を実践した保育者が現場で得た情報を付加して作成するドキュメンテーションは、記憶を頼りに作成する記録文書とはその手間や取り組みやすさの面で大きな違いがある。目の前にないものを説明するよりも、目の前にあるものを説明する方が、より具体的な内容を容易に説明できるからである。本研究において、４名の保育者がともに、ドキュメンテーションの作成に対しては、さほど労力を感じなかったのは写真によって保育を思いだすことが比較的容易であったからだと考える。ドキュメンテーションに写真を用いることは、その導入方法として取り組みやすいものだと考える。

２）ドキュメンテーションを作成する際の観点について

本研究において、保育者に対してドキュメンテーション作成の観点を①子どもが探求している場面（子どもが自分から動き出している場面、活動が継続・変化している場面、誰かと協同的なかかわりが生まれている場面、気づき）、②会話（子ども同士、保育者とこども、ひとり言）③保育者の関わりについて（声掛け（どうなるかな、～しましょう、～してみよう、すごい！面白いね！など）、やって見せる（見本、勝手に横でやる）など）④課題、問題、困ったこと、の４つを示した。このような観点でドキュメンテーションを作成してみてわかったことは、保育者自身の視点が記録の中から抜けやすいということである。年中クラス担任の元木先生は振り返りの中で「ドキュメンテーションを作り始めた当初は、「遊びの種類と幅」「誰と遊んでいるのか」「トラブル、その原因」を記録していた。徐々に「保育者が関わった遊び」「保育者の声掛け」「保育者の働きかけに対しての子どもの反応」「環境設定」も記録していくようになった。子どもたちの記録だけではなく、保育者自身が何をしていたかに目を向けることで子どもたち全体の姿を見ることができるようになった。回数を重ねていくことで、子どもたちそれぞれの思いや成長もより感じることができた。」と述べている。

一概に言うことはできないが、日ごろから子どもの視点や行動、気持ちを考えることに集中している保育者は保育中に自分が何をしていたかを思い返す機会が少ないと考えられる。大量の紙コップを使った遊びが４か月継続した年中クラス、年長クラスのドキュメンテーションを見ると、最初は子どもたちがどのような遊びを行っていたかの記述にとどまるが、徐々に保育者の関わり、声掛け、意図が記録されるようになった。また保育者自身の視点が記録されるようになると、子どもたちが協同して紙コップを積む様子や、壊されないようにする工夫など子どもたちの表面的な行動の記録だけにとどまらない保育のプロセスが物語のように記録されるようになった。保育中の保育者自身の姿を客観的に省察することが子どもたちを様々な関わりの中に関係づけてとらえる能力に繋がるのではないかと考える。保育者の視点をドキュメンテーションの中で明確にしていくためには、ドキュメンテーションを導入する際の観点において、保育者自身の関わりや働きかけを特に意識しながら子どもたちの姿を記録することが重要である。本研究では途中からドキュメンテーションに記録される保育者の声掛けや行動の部分は色ペンで書かれたり、蛍光マーカーで線が引かれるようになった（図11）。記録を行う保育者からのアイデアであったが、線を引くことが保育者自身の行動を客観

的に捉える良い方法になったと考える。

図11　保育者の声がけに蛍光マーカーが引かれたドキュメンテーション

3）大量の紙コップを使った遊びをドキュメンテーションの対象とした点について

大半のスマートフォンにカメラが搭載され、写真を撮る行為は多くの現代人にとって日常的な行為となっている。またデジタルカメラは、フィルムカメラとは違い写真の撮り直しは何度でも行え、印刷する写真をパソコンで選ぶことができる。保育現場で写真を活用することも当たり前になってきている。しかし、４名の保育者の振り返りには、保育を実践しながら写真を撮ることの難しさが述べられている。保育を一人で進めながら、写真を撮ることはかなり困難であることが分かる。子どもとの関わりより撮影が優先されては本末転倒である。撮影者を常に確保できることが理想ではあるが、現状では撮影しやすい保育設定をつくり、撮影の負担を減らしドキュメンテーションを行う取り組みもその導入方法として検討できると考える。

本研究において、大量の紙コップを使った遊びをドキュメンテーションの対象とした理由は２つある。

一つは写真を撮影する負担を減らすのではないかと考えたからである。大量の紙コップを使った遊びには、砂場遊びと積み木遊びを合わせたような特徴がある。砂場遊びのような特徴として、紙コップ（砂場であれば砂にあたる）が大量にある環境の魅力によって活動を始めるきっかけが作りやすいこと、自由度が高く様々な活動へ展開できること、保育者が活動すべてを先導しなくても良いことなどが挙げられる。また積み木遊びのような特徴として、基本単位の形（紙コップの形）を組み合わせて造形できること、制作した結果を目に見える形で残すことができ、何度でもやり直しがきくこと、素材の保管と子どもたちへの提供が容易であること、などが考えられる[8)]。結果的に保育実践において、このような特徴を持つ大量の紙コップを使った遊びでは非定型的な遊び[9)]が広がった。折り紙を折る活動のように１から10まで、保育者先導で保育を進める必要がなく、保育者は教授するというよりは、子どもたちと一緒に遊びながら、即興的に保育を進めることになった。保育者先導の活動より写真を撮る余裕ができたと考える。また、２クラスある年中では２クラス合同での保育実践も多くなった。紙コップが大量にある環境は、２クラスの子どもたちが合同で遊ぶことを可能にし、その結果、２名の担任で一つの集団を見ることができたため、撮影する余裕もできた。この点は、大量の紙コップを使った遊びをドキュメンテーションの導入時の保育内容とした利点であったと考える。

理由の二つ目は、子どもの主体性を引き出したい、子どもたちに遊び込む経験をさせたいという保育者側からの要望に合わせた遊びとなると考えたからである。また、そのような遊びが継続できれば、保育者のドキュメンテーションへの意欲も上がるのではないかと考えたからである。結果として、非定型的な遊びである大量の紙コップ遊びは保育者自身が予想していない方向へ子どもたちの活動が進むことが多かった。予想外に驚きながらも前向きに子どもたち同士の協同的な遊びを発展させる働きかけをドキュメンテーションからは読み取ることができた。継続したドキュメンテーションができると、そこには子どもたちの遊びの繋がり、学びの連続が変化のある物語として表れていた。自分のクラスの子どもたちの成長の物語が目に見える形で出来上がっていくことで、保育者のドキュメンテーションへの意欲が上がると考える。保育者の前向きな働きかけが前提になるが、大量の紙コップは遊びの継続をつくりだしやすい素材だと言える。遊びの継続が保育者のドキュメンテーションを作成する際の面白さに繋がり、また遊びを継続させる保育者の意欲や工夫を生み出すと考える。

２歳児クラス、年少児クラスでは、大量の紙コップを使った遊びが継続的な遊びには展開しなかった。複数人で紙コップを積み上げたり、競争したりという協同的な遊びにはならず、遊びには一人で行う見立て遊びが多く見られた。それはこの年齢の子どもたちが目の前のモノや保護者、友達、保育者と関わりながら、二人称的世界[10)]との関わりを始めたばかりであるからだと考える。目の前に突如としてばらまかれた大量の紙コップに対して、２歳児クラスの子どもたちは驚き、体が固まったと記録されている。子どもたちにとって、大量の紙コップはあまりにも未知な三人称的道具[11)]であったのかもしれない。まずは自分の置

かれた状況を確かめ、そして紙コップの構造や自分と紙コップの関係を確認することが優先され、友達と紙コップで一緒に遊ぶことまで考えが及ばなかったと考える。２歳児や３歳児のように素材や環境設定のみで協同的で継続的な遊びを展開させることが難しい場合は、ドキュメンテーションの導入方法としては、例えば、対象児を一人に絞ったドキュメンテーションであったり、場面を絞ったドキュメンテーション（給食、昼寝、帰りの場面など）の方が子どもたちの成長の物語が見えてきやすく、保育者もドキュメンテーションへの面白さを感じることができるのではないかと考える。

４）ドキュメンテーションの書き方について

本研究においては写真を使ったドキュメンテーションの書き方について、形式を限定することはしなかった。形式を決めるとその形式（空欄）を埋めることや記録すること自体が目的になってしまい、幼児の理解や保育実践に対する保育者自身の省察が進まなくなると考えたからである。写真を使い、自分なりの方法で保育を見つめなおすことがドキュメンテーションを導入する重要な意義だと考えた。不慣れなパソコンではなく、マスキングテープと手書きによる作成にしたのは少しでも記録に対するストレスを減らし、保育の振り返りを楽しんで行うためである。

本研究では、それぞれの保育者が独自の方法でドキュメンテーションを行った結果、筆者の予想していなかった様々な記録の方法が見られた。子どもの姿を対比させた記録の方法（図３、４）や保育者の子どもに対する関わりや声掛けの記述へのアンダーライン（図11）、環境構成（図12）や子どもが製作した紙コップタワーの形態の変化を図示したもの（図13）が見られた。図12では、子どもたちへ時間を伝える際の時計の示し方、声掛けの方法も図示され、保育者が時間というとても難しい概念を子どもたちへ伝えるための工夫を読み取ることができる。このような創意工夫があるドキュメンテーションは型が決まった記録文書では決して出てこない発想である。それは日々の保育の中では一瞬に過ぎないが、保育者が子どもたちに向けるまなざしが純粋に可視化されたものだと感じた。より高く紙コップを積み上げるための子どもたちの試行錯誤や友達との協同作業は子どもたちの成長と学びである。それは保育者の喜び、楽しさであり、それを他者と共有するためのドキュメンテーションは保育者の表現でもある。形式やマニュアルを作ることは記録することを楽にするが、保育者の表現という意味でのドキュメンテーションの面白さを奪ってしまう。写真から見えること、さらに写真だけでは見えない子どもたちの遊びのプロセスや背景が保育者の視点で書き込まれたドキュメンテーションは保育者の喜びの表現として、保護者や第三者にもそれが伝わるものになっていくと考える。子どもの成長や学びは保育者にとっても保護者にとっても喜びであるからである。形式を限定しないドキュメンテーションには、より高い保育者の能力が求められる。しかし、ドキュメンテーションを導入するにあたっては、形式を決め過ぎずできる限り楽しく作成できる環境を整えながら、保育者の経験や園での用途に合わせた書き方を探していく方が良いと考える。

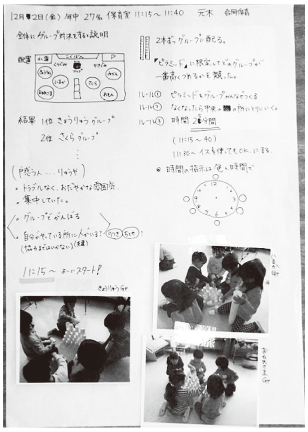

図12　環境構成が書かれたドキュメンテーション

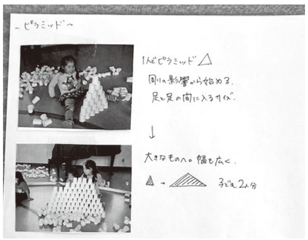

図13　紙コップタワーの形態の変化を図示したもの

５）ドキュメンテーションを他者と共有することについて

ドキュメンテーションを作る意義は、保育者自身が保育を客観的に省察できる以外に、それを他者と共有し、保育についてコミュニケーションを取れることにある。「見えない教育方法」である幼児教育のプロセスが文章だけでなく写真によって可視化されるため、保育について具体的な内容を話し合うことができる。本研究においては、ドキュメンテーションを共有する範囲を保育者間とした。保護者向けに作られるドキュメンテーションは写真に簡単なコメントや子どもが話していそうなセリフを書き込まれたものがよく見られる。しかし、そのような保護者への発信手段としてだけのドキュメンテーションでは、保育者自身の振り返りに集中することはできない。なぜなら、保護者が見ることに対して気を使ってしまうからである。４名の保育者のそれぞれの振り返りからは、自己の保育を見直す記述や子どもに対する新たな発見が見られたことから、ドキュメンテーションの目的を保育者自身の省察や幼児理解に重点を置く場合、その共有範囲を保育

者間とすることは有効であると考える。

保育者間のドキュメンテーションの共有方法として、今回はポスター発表という形をとった。保育者４名で合計124枚という予想以上のドキュメンテーションが作成され、一枚ずつのドキュメンテーションについて議論していく時間が取れなかったためである。ポスター発表の参加者には付箋を渡し、面白かったところには「いいね」と書いて貼ってもらったり、感想や質問があれば直接、作成者と話してもらった。結果的には参加者に気軽な気持ちでドキュメンテーションという方法に触れてもらうきっかけとなり、ドキュメンテーションを他者と共有する導入という意味では良かったのではないかと考えている。

２歳児クラス担任の庄司先生は振り返りの中で、「ドキュメンテーションとしてまとめることによって、見ていただいた先生方から質問をいただき、普段は何気なく保育の中で自分が言っていることや子どもたちの姿、かかわりなどを考えたり、振り返ったりすることができた。（どうして、はだしで遊んでいるの？見立て遊びの「バイオリン」の発想はどこから来てるの？…など。）」と述べている。「どうして、紙コップ遊びをはだしでしているのか。」という質問は写真を見なければ出てこない問いかけである。

他者から質問され、改めて自身の保育やクラスの子どもについて考えたという感想は他にも見られた。自身の保育実践について、写真を用いたドキュメンテーションを使い、保育を見える形にして他者と話し合うことが、客観的に自己と子どもの関わりを省察する機会となり、新たな子ども理解や保育の展開に繋がるのだと考える。

２．ドキュメンテーションから見える保育者の専門性について

１）ドキュメンテーションの作成による保育者のまなざしの変化

写真を撮ることは自らの視点を記録する行為である。保育を写真に撮るということは保育者の子どもたちへのまなざしを記録することになる。第三者に写真を撮ってもらった場合は第三者の目線で見た保育を実践する自分も記録されることになる。そして、写真を用いたドキュメンテーションを作成することは保育のプロセスを思い返しながら視覚化することである。

本研究において大量の紙コップを使った遊びが結果として４か月ほど継続することになった年中クラスと年長クラスのドキュメンテーションの写真や記述方法を見てみると、後半になるにしたがって保育者の視点がより明確になっていった。子どもたちの工夫している姿、協力している姿、一人の子どもに注目して記録するなど、写真を撮る際の、また活動を思い返しドキュメンテーションを作成する際の保育者の視点や意図が明確になったといえる。また、保育者の関わりや声掛けとその結果が意識され、保育のプロセスが分かりやすいドキュメンテーションになっていった。それは保育者のまなざしが変化したともいえる。写真を撮影し、それを客観的に見直し記録する行為の繰り返しが保育への意識変容をもたらすのだと考える。保育のプロセスを客観的に見直し前向きに意識変容を行えることが子どもたちの遊びの中から学びや成長、あるいは変化を見つけ出す保育者のまなざしを育てる。子どもたちへのまなざしを更新し続けることができることは保育者に必要な専門性だと考える。逆に言えば、写真を用いたドキュメンテーションを作成することが保育者のまなざしを更新するきっかけにもなるのではないかと考える。保育者にとっては、日々絶え間なく即興的に進み消えていってしまう子どもとの膨大な関わりのほんの一部ではあるが、写真によって切り取られた時間を冷静に思い返す時間が多忙な現場においても確保できることがとても重要である。

２）遊びの結果を遊びのプロセスにする

年長クラスの村岡先生は振り返りの中で、11月15日に行った保育実践において紙コップを積み上げた作品を残しておいたことについて、「いつもは紙コップを箱に片付けてしまうところを、「せっかくここまでやったから残しておきたいな～」「きっと子どもたちはそれがいいって言うだろうな～、続きでまた遊びが始まればいいな～」と想像し、紙コップを積んで作ったものを残した。子どもたちは「えっ、このままでいいの⁉」と驚き、喜んでいた。その後、作ったもの、残したいものは残していくことが定着した。」と述べている。本来、遊び終わったおもちゃとしての紙コップは箱にすべて片付けていたが、保育者が子どもたちの気持ちを汲み取り、遊びの継続を考えて柔軟に対応している。大量の紙コップを使った遊びの特徴である作品が残るという特性を生かした保育者の環境構成に一つだと考えられる。結果として子どもたちは積み上げた紙コップを残すことができることに喜び、その喜びが次の日以降も遊びを継続し続ける原動力となった。積み上げられた紙コップは子どもたちの遊びの結果である。これを片付けずに残しておくことは遊びの結果を重視しているように見える。しかし、遊びの結果が残ることで、子どもたちのモチベーションが上がり、次への遊びの展開に繋がっている。遊びの結果を遊びの大きな流れのプロセスとしてとらえる視点を保育者

が持っていることがわかる。

「幼児教育において育みたい資質・能力が、環境を通して行う教育、遊びを通しての総合的な指導を通じて身につけられる[12]」ならば、まずは子どもたちが夢中になって遊べる時間と環境を作ることが一番大切である。遊びという自発的な行為[13]を支える保育者の関わり方は遊びの種類や保育者のタイプによって様々である。遊びを保育者が先導するのか、子ども主体なのか考え方は園やそれぞれの保育者によっても異なるだろう。遊びの目的は行為そのものの中にある[14]。どのような保育の考え方であっても、遊びの結果に目的を求めすぎずに、遊びのプロセスへ目を向け子どもたちが夢中になって遊べる時間と環境を確保することが保育者の専門性であると考える。ドキュメンテーションを作成することは保育者に遊びの結果から遊びのプロセスへと目を向けさせるきっかけとなりうるのではないかと考える。

Ⅴ．今後の展望と課題

ドキュメンテーションの作成とポスター発表を通して、その導入方法を検討することができた。ドキュメンテーションの導入について、写真を用いること、作成の観点、記録対象、書き方、共有の方法の点から示唆が得られた。また、ドキュメンテーションを作成すること自体が保育者の専門性の向上に繋がる可能性を考察することができた。そして、ドキュメンテーションについて考察する中で、今後は保育者の専門性について、保育者の関係をつくりだす能力が求められてくるのではないか考えた。

まずは子どもとの関係をつくりだす能力である。子どもの視点に立ち、子どもと対話し、子どもの成長のために様々な方法で関わることである。言葉にすると簡単に聞こえるが、４名の保育者のドキュメンテーションからは、その難しさを十分に感じることができた。また、子どもの成長に対しての記述からは保育者の喜びを感じることができた。ドキュメンテーションを子どもたちとの対話のきっかけとし、遊びを広げる方法も検討できればと考える。

次に保育者同士の関係を作り出す能力である。保育は一人で行うことはできず、保育者同士の協同は欠かすことができない。ポスター発表を通して、保育者同士が保育について話し合うことの大切さが実感できた。かっちりとした会議や研修の形でなくとも、ドキュメンテーションを見ながら気楽に話すことはそれ自体が保育の振り返りとなり、保育者のまなざしを更新する。保育者同士が気軽に保育についてコミュニケーションを取れる場は新人の保育者に限らずとても重要であり、そのような場をコーディネートできる能力が一部の保育者には求められてくると考える。園全体で子どもの成長や学びを喜び、変化に対応する風土づくりや風通しの良い職場づくりに活用できるのではないかと考える。

最後に保護者や地域との関係をつくりだす能力である。本研究においては、ドキュメンテーションを保護者に公開することはしなかった。保護者へ公開する際には、喧嘩している、遊びに参加できないなど、保護者にとって不安になる子どもの様子を記録したドキュメンテーションはどうするか、など記述の方法にも気を使わなければならないからである。しかし、４名の保育者が作成したドキュメンテーションは保護者にとって、とても魅力的なものであったと考える。自分の子どもが何かに夢中になって取り組む姿がそのプロセスを含めて理解できることは、保護者にとってうれしいことであると想像する。例えば、本研究で作成されたドキュメンテーションを保護者へ掲示した場合、何がおこっただろうか。自分の子どもがどんな遊びをしていたか、どんなものを作ったか、だれと遊んでいたのか、何を話していたのか、など保育者から保護者へ今日の出来事を伝えなくても、保護者から質問されるかもしれない。紙コップ遊びの様子を伝えることがきっかけで家での子どもの様子が聞け、幼児の理解が進むかもしれない。家でも紙コップ遊びの話を子どもと保護者がしたかもしれない。保護者から新しい遊びのアイデアがもらえたかもしれなし、もしかしたら紙コップより全然楽しい素材をどこかの工場の廃材からもらえるなんてこともあったかもしれない。すべて筆者の前向きな妄想に過ぎないが、子どもたちの姿を中心にした保護者や地域との関係づくりには大きな可能性があるのではないかと考える。

年長クラスのドキュメンテーションの最後に子どもたちが卒園に向けて楽しかったことを描いた絵が付け加えられていた（図14、15）。絵には大量の紙コップを使った遊びをする様子が描かれている。何も知らずに、この絵だけを見せられた大人には子どもたちが積み木遊びか何かをやっていることしか読み取れない。しかし、数十枚のドキュメンテーションを見た後にこの絵を見たらどうだろうか。ドキュメンテーションからは子どもたちが夢中になって紙コップ遊びをした４か月以上の時間を読み取ることができる。また、その間に起こった友達や保育者との様々な関わりから生まれた物語が想起される。同じ絵であっても、ドキュメンテーションがあることで、絵の見方は全く変わってくる。想起された物語は保護者はもちろん、多くの人の心を動かすものになると考える。

保育者は目の前の子どもに一生懸命であるし、それが一番大切である。自身の保育について振り返ったり、まして周辺の関係づくりまで考える時間的、人的な余裕が今の保育現場にあるとは思えない。しかし、少しずつでも「見えない教育」である幼児教育を脚色のない子どもたちの物語として見えるようにしていくことが保育を開き楽しくしていくことに繋がるのではないだろうか。そのためのコミュニケーションツールとなるドキュメンテーションが少しでも楽しく行える方法を検討していければと考える。

図14　年長クラスの楽しかったことの絵①

図15　年長クラスの楽しかったことの絵②

引用文献・註

1）イギリスの社会教育学者バーンスティン（Bernstein,B.）は、幼児教育の特徴を「見えない教育方法（invisible pedagogy）」ととらえ、その定義を６点にまとめている。（『幼児学用語集』110頁）
2）「保育の質研究の展望と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要第47巻289～305頁
3）レッジョ・エミリア・アプローチ（Reggio Emilia Approach）とは、イタリア北部レッジョ・エミリア市の幼児教育プログラムの総称である。1991年12月、アメリカの週刊誌「NEWS-WEEK」が世界で最も革新的な幼児教育施設としてレッジョ・エミリア市のディアーナ幼児学校を全米に紹介した。（『幼児学用語集』138頁）
4）『幼児学用語集』114頁
5）『スウェーデン保育の今　テーマ活動とドキュメンテーション』52頁
6）『新時代の保育１　保育におけるドキュメンテーションの活用』58頁、『学びの物語の保育実践』48～49頁を参考にした。
7）幼児教育研究会は主に羽陽学園短期大学の教員とその附属園の保育者が集まり、年に３回開催される。短大の附属幼稚園連携委員会が中心となり運営され、毎回約20名ほどが参加し、保育全般をテーマにワークショップや情報共有などが行われる。
8）『幼児教育のデザイン　保育の生態学』94～118頁を参考にした。
9）『対話と保育実践のフーガ　時代と切りむすぶ保育観の探求』125頁
10）『「学ぶ」ということの意味』66頁
11）同上、68頁
12）文部科学省　幼児教育部会における審議とりまとめ（平成28年８月26日）
13）『ホモ・ルーデンス』73頁
14）同上、73頁

参考文献（発行年順）

1）ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』 高橋英夫訳　中央公論者　1973年
2）佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店　1995年
3）J.ヘンドリック編『レッジョ・エミリア　保育実践入門　保育者はいま、何を求められているか』 石垣恵美子、玉木哲淳監訳　北大路書房　2000年
4）大宮勇雄『保育の質を高める　21世紀の保育観・保育条件・専門性』 ひとなる書房　2006年
5）秋田喜代美、箕輪潤子、高櫻綾子「保育の質研究の展望と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要第47巻　2007年
6）加藤繁美『対話と保育実践のフーガ　時代と切りむすぶ保育観の探求』 ひとなる書房　2009年
7）『学びの物語の保育実践』大宮勇雄　ひとなる書房　2010年
8）秋田喜代美、佐川早季子「保育の質に関する縦断研究の展望」 東京大学大学院教育学研究科紀要第51巻　2012年
9）レッジョ・チルドレン『子どもたちの100の言葉　レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』 ワタリウム美術館編　2012年
10）小田豊、山崎晃監修『幼児学用語集』 北大路書房　2013年
11）白石淑江、水野恵子『スウェーデン保育の今　テーマ活動とドキュメンテーション』 かもがわ出版　2013年
12）無藤隆『幼児教育のデザイン　保育の生態学』 東京大学出版会　2013年
13）大豆生田啓友編『「子ども主体の協同的な学び」が生まれる保育』 学研教育みらい　2014年

14）磯部錦司・福田泰雅『保育のなかのアート』 小学館　2015年
15）請川滋大、高橋健介、相馬靖明編『新時代の保育１　保育におけるドキュメンテーションの活用』ななみ書房　2016年
16）森眞理『ポートフォリオ入門』 小学館　2016年
17）無藤隆『これからの幼児教育2015年度春号』「生涯の学びを支える非認知能力をどう育てるか」 ベネッセ教育総合研究所　2016年

謝辞

本研究にご協力いただきました附属幼保連携型認定こども園鈴川第二幼稚園の教職員の皆様と子どもたちに心より感謝申し上げます。

SUMMARY

Kensuke HIGUCHI,
Misa MURAOKA,
Asami MOTOKI,
Misato ONISHI,
Megumi SYOJI:

Consideration about How to Introduce Documentation
− Through Child Care Practice Using a Large Number of Paper Cups −

In this study, we consideration how to introduce it through the creation of documentation and poster presentation. Using photographs for documentation has advantages in ease of looking back child care and sharing child care with others. We consider that playing with a large number of paper cups is easy to document in terms of ease of shooting, securing of the photographer, spread of children's play. However, since the play did not spread in the 2 year old and 3 year old class, the documentation did not continue. An important point of documentation was that the caregiver was particularly conscious of child engagement. By conscious of it, the caregiver ourselves reflected on it. The method of documentation was created in a wide format, so that the interest of documentation as a caregiver's expression was seen. Documentation using photos changed the idea of the caregiver and focused on the process of play from the result of play. We consider that making documentation changed the viewpoint of the caregiver and could lead to improvement of the expertise of the caregiver professional.

(K.HIGUCHI ; Uyo Gakuen College)
(M.MURAOKA, A.MOTOKI, M.ONISHI, M.SYOJI ; Suzukawa Daini Youchien Centers for Early Childhood Education and Care attached to Uyo Gakuen College)